【お題に挑戦】秋桜 ~もうひとつの後日談~

紫月

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16988261

ヒュンマ

本作は、作者がTwitter上のお題ガチャで、〝「お前が望むなら何度でも」の台詞を用いて話を書く"とのお題を引き当てたことから生まれました。
こちらの話を公開する１週間前に、ちょうど拙作「恋文」novel/16927130を公開していたのですが、この台詞を見たとき、ぱっと本作の骨格が浮かびました。
上記「恋文」から、長編小説「碑」へ（2022年2月12日現在未公開）、さらにその後日談のような位置付けになる話です。
ただし、こちらは、あくまでもパラレルワールドの話。
正式な後日談というよりは、「こんな未来が待っているかもしれない」といった感覚でお読みいただければ幸いです。

お題は、なかなか自分では考え付かないシチュエーションに挑戦することが出来、いつも楽しませていただいています。
今回も、とても楽しく書かせていただきました。
お題作成者さまの意図する方向とは、異なるテイストの話になったかもしれませんが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

「恋文」に引き続き、美しい表紙をお借りしました。illust/85307107

【お題に挑戦】秋桜 ~もうひとつの後日談~

優しく頬を撫でる風の気配で、私は目を覚ました。最初はぼんやりしていた視界に、ひたすらに満ちていたのは、眩い光。やがて少しずつ、辺りのものが、色と形を明確に主張し始める。
「おはよう、気が付いた？」
声に振り向くと、隣には去年も一緒だった、濃いピンクの子が立っていた。
「今年も会えたね。また、よろしくね」
「……うん」
まだ少し、頭がぼおっとしている。ぐるりと見回すと、隣の子の他にも、仲間たちがさやさやとおしゃべりを楽しんでいるのが見えた。
ふわんと見上げると、頭上には、吸い込まれそうに高くて遠い空がある。それを目にした途端、ぱっと意識が明瞭になったのを自覚した。
秋だ！私は、今年もここに来たんだ。
他の場所を知っているわけじゃない。一年の大半を、私はうつらうつらしながら過ごしているから。でも、断言できる。ここは、世界で一番愛しい場所。太陽と風が笑い、彼方に海の煌めきの見える、そんな丘。

どうやら今年、私はだいぶ出遅れたらしい。辺りは一面、ピンクのグラデーションに染め上げられて、あっちでもこっちでも、再会を喜ぶ声、先に咲いた子たちが最新の噂話を楽しむ声がする。なにせ、一年ぶりの会話なのだ。みんな、夢中になっておしゃべりを楽しんでいる。基本的に私たちは、話すことが大好きだし。
さやさや、さややん。さやややや ん。
でも、そんな私たちでも、ふいっと黙りこむ瞬間というものがある。

「しーっ！」
少し下方にいる子が、合図を送って寄越して、私たちは慌てて口をつぐんだ。
しばらくすると、かさっかさっと、誰かが丘を上ってくる気配が伝わってくる。この足音———は、小さくもないし、かといって大きな生き物でもなさそうだし。人間かな？ふたり、かな？
予想は当たった。
数分後、姿を見せたのはふたりの人。片方は、背の高い男の人。銀色の髪がきらきら輝いていたけれど、太陽のように眩しくはなくて、私はなんとなく、月の光を思い出した。
もうひとりは、女の人———あれ？あの人の髪、私の色によく似ている。
そう思ったのは、私だけじゃなかったみたいで、ひそひそひそっ、
「ねえ、あなたとおんなじ色の髪。珍しいね」
隣のあの子が、こちらに身を寄せて囁いてきた。
でも、すぐに彼女も黙り込む。誰に見咎められたわけでもないけれど、人間たちがいるときに話し声を聞かれないようにするのが、私たちのルールだから。私も彼女も周りの子たちも、お行儀よく、おすましをして前を向く。
「よかった。今年も綺麗に咲いているわね」
聞こえてきたのは、柔らかい声。私に似た色の髪をした、あの女性の方だって、すぐに判別出来た。昔は、人間の男女の声の違いなんて、なかなか判らなかったのだけれど、何度も何度もこの丘に戻るうち、私も経験値が上がってきたみたい。
「そうだな……あの日と同じだ」
ほら、返った声は、さっきのものに比べるとずっと低くて、男の人の声ってこうなのよね、と、私はひとり頷いてみる。それにしても———なんだろう、すごく優しい話し方をするのね。
「もう三年？いや、四年になるのか？」
「四年前よ。なんだか、ついこの間のことのような気もするけれど」
「そうだな……それなりの時間が経ったはずだが、オレの中では、全てが夢の中の出来事のようで、どこか現実味がないように思え

る」
「夢？」
「楽しい夢ではなかったがな……いや、夢というのも正確ではないか。その夢の中でも、オレは、しょっちゅう夢を見ていたから」
なんだか興味をそそられる話だ。振り向いて見てみたくなったけれど、ぐっと我慢して、私は前を向いていた。
それでも、彼女が、視線で彼に問い掛けている気配のようなものを感じた。果たして、彼は、彼女に答えるかのように続きを語り繋げる。
「……お前の、夢だった」
「……そう」
「ああ……そこで、いつもお前は笑っていて……ただ、不思議なことに、音はいつも聞こえない。お前が何かしゃべっているのは見えるんだが、その内容は判らない。それに……どんなに必死に呼び掛けても、声は届かない。そんな、孤独な夢だった」
ふっと、静寂が訪れる。私たちは、息をひそめて、ふたりの醸し出す空気を壊さないように努めていた。何と言えばいいのだろう、一見他愛ない会話をしているように見えながら、この人たちは、とても大切なことを話しているのだと感じられた。
はるか高く、鳥が鳴きながら飛んでいく。
「――――不思議ね」
長閑な鳥の声に、少しばかり張りつめていた空気が緩んだのだろうか。背中を押されたように、次に口を開いたのは、女の人の方だった。
「私も、同じだった」
「同じ？」
「そう。私も、何度も何度も、この丘の夢を見たわ……あなたと、最後に会えた日のことを」
「マァム……」
「行かないでって、もう少し一緒にいたいって、夢の中でも、私、思っているの。でも、言えないのも現実と同じ。せめて夢を見ているときくらい、勇気を出せればいいのに。だめね、現実世界で臆病な私は、夢の世界でだって怖がりだったんだわ」

彼女の声が、ほんのちょっと潤んだ。彼は、黙って彼女の言葉の続きを待っている。
「ずっと、後悔していたの。あの日、本当は帰りたくなかった。もう少し、あなたとここで、この花を見ていたかった。そう素直に言えていたら……勇気を出せていたら……何かが変わっていたのかしらって。あなたを、手放さずに済んだのかしらって」
「……すまなかった」
苦しげに絞り出す声を、彼女の声は、すぐに打ち消す。
「違うの、責めているんじゃないわ。もちろん、寂しかったし切なかったけれど……でも、この四年を越えたから、あなたは、またここにいてくれるのでしょう？私たちの日々は、無駄なんかじゃなかったでしょう？」
「無論だ」
「そう、そうよね。だからね、私は、あなたのことも、昔の私自身のことも、責めたいんじゃないの。そうではなくて」
かさり。小さな音がして、ふたりの距離が縮まるのが判った。
「私……うれしいの。あなたと、またここに来られて。あなたと、またこの風景が見られて」
言葉の最後が、わずかにくぐもる。まるで、顔をどこかに押し付けながらしゃべっているみたい。
「そうだな……オレも、うれしい。また、この景色を見ることが出来て……お前と、ここに立つことが出来て」
「―――一個だけ、聞いてもいいかしら？」
「―――何だ？」
彼女の声が、震えているのが判った。何を尋ねるのだろう。なんだか、こっちまでどきどきしてしまう。
「―――また来年も、一緒に来られる？」
「―――お前が望むなら、何度でも」
「何度でも？来年だけではなくて、再来年も、その次も？」
「ああ。何年も何十年も時を重ねて、互いに年老いても」
「本当に？生きている限り、毎年一緒に来てくれるのね？」
「いや」
「えっ……」

思わず息を呑んでしまった。隣のあの子が、慌てて脇腹を突いてきたので、かろうじて、それ以上の声を出すのは防げたけれども。どういうこと？短く漏らした彼女の声が、不安と悲痛に揺れていて、聞いているだけで、私も胸が痛くなる。
「マァム」
黙りこんだ彼女に、彼が呼び掛ける声が響く。あれ？どうして、そんなに柔らかな声をしているの？
「この生命がある限り……もちろん、オレはお前と共に在る。だが、オレは、そこで終わらせるつもりはない」
「―――ヒュンケル？」
「この人生が尽きたなら……そうだな、あんな風に空を飛ぶ鳥になって、ふたりでまた、この丘を見よう」
「―――あ……」
「ここに立って見る光景も、美しい。しかし、上空から眺めるこの地も、きっと、間違いなく美しいだろう。ふたりで、一緒にいるならば」
「なら……なら……」
彼女の声は、まだ震えを帯びている。けれども、不思議なことに、それは、さっきまでの震えとは、少し様子が違うように思えた。
「鳥になって……その生命も終わってしまったら？」
「そのときは、ここを渡る風になろう」
間髪入れずに、彼は答える。
「世界中を……海も山も森も越えて、秋には、この丘に戻ろう。花々と共に踊る時間も、お前とふたりでなら、なお楽しいだろう」
「なら……それなら……」
ああ―――解った。
今、私たちは、ふたりの人間の、とても重要な場面に立ち会っているんだって。この人たちがしているのは、ただのおしゃべりなんかじゃない。生涯を賭けた、大事な約束を交わしているんだって。
彼女の声音は、もうたっぷりと濡れてしまっていた。私たちは、呼吸も忘れ、固唾を呑んで会話の行方を見守った。
「その風も、止まってしまったら？」
「そのときは……ふたりで、この惑星の欠片になろうか」

「惑星の、欠片？」
「ああ。大地の中で手を繋ぎながら、永く穏やかな夢を見よう。
時々、目を覚ましては、地上の花を眺め、鳥の歌を聴き、風の運ぶ薫りを感じて……眩い空の光に目を細め、そして、地上を守れたことを喜ぼう。お前とオレが、生まれ出会えた、この場所を」
「ヒュンケル！」
「マァム。約束しよう。オレたちは、永遠に一緒だ」
う……わあ！
もう我慢出来なかった。私は、彼らの方を振り返る。周りから叱られても構わないと思った。どうしても、どうしても、美しいであろう場面を見てみたかった。
でも、誰も私を叱ったりしなかった。そうよ、だって、そのとき ちょうど強い風が駆け抜けて、みんな一斉に、私と同じ行動を取っていたんだもの。
きらきらと輝く目をして向き直った私たちに、けれど、ふたりの顔は見えなかった。少しばかり西に傾き始めた太陽が、なんとも意地悪なことに、私たちの目を射ていたから。目にすることが出来たのは、重なって、ひとつに溶け合うシルエットだけ。でも、どうしてかしら？ただ黒で塗り潰されたような影絵が、私には、天上の美に思えたの。
そのとき、また、風が吹いた。彼らの方からやってきた風は、甘い香りと、一粒の雫を運んできた。ぴちゃん。私の花弁で弾けたそれは、なんとも言えない、甘くて優しい味がした。
(ねえ、私。きっと、これからも咲くからね。何度も何度も、ここに帰ってくるからね！)
とうとう、声をあげてしまったわ。今度こそ、怒られる！
ところが、仲間たちも、みんな一緒に同じことを叫んでいたのよ。
さやさや、さややん！さやややや ん！
大丈夫、ひたすらに抱きあう恋人たちには、きっと葉擦れの音にしか、聞こえなかったことでしょう。

終